

## 四国遍路と札所寺院 —香川県の札所寺院調査から—

上野 進 (香川県立ミュージアム 学芸員)

### **The Shikoku Pilgrimage and its temples – An investigation of Shikoku pilgrimage temples in Kagawa prefecture. Susumu UENO Curator, Kagawa Prefectural Museum**

Recently, research on the Shikoku pilgrimage has made remarkable progress and many results are being accumulated. However, not a lot of research on Shikoku pilgrimage temples has been carried out, and it is not always obvious whether any of these temples have any unique characteristics. The Hondo and Daishido are indispensable parts of present-day temples of the Shikoku pilgrimage, but in many cases the Daishido was constructed during the early modern period. In the paper I will examine the actual state of Shikoku pilgrimage temples during the Edo period by looking at the results of investigations about temples in Kagawa prefecture, which are being carried out as part of the process to obtain World Heritage Site status for the Shikoku pilgrimage. Above all, I will study the characteristics of Shikoku pilgrimage temples by focusing on specific aspects of such buildings as the Daishido and Chado (tea hut).

At Temple 81, Shiromineji there was a temporary Daishido in 1792, but from this period reconstruction begun and due to donations by believers, it was rebuilt in 1811. In 1801 Shiromineji asked that the pilgrimage path be replaced for pilgrims and for those who came to pray at the temple. As well, even though the period is unclear, Shiromineji constructed a tsuyado and continuously tried to offer osettai to pilgrims. We can confirm the existence of the tea hut by 1800. From the inscription of a stone osettai monument made in 1745 at Temple 70, Motoyamaji we discovered that during this period people in the neighbourhood offered osettai on the temple grounds. In the same year the tea hut was constructed. The Daishido was built in 1795, but pilgrims were involved in the construction of the buildings. Even at Temple 86, Shidoji the Daishido was a temporary building in 1828, but due to the faith of the pilgrims a movement to collect money was started and in 1833 it was rebuilt. On the temple grounds there is an osettai stone monument, which states that people from Shodoshima participated in osettai activities at Shidoji.

As stated above such activities as the building of tea huts and the reconstruction of the Daishido acted as a space to welcome pilgrims at the Shikoku pilgrimage temples during the late Edo period, and we can see the character of these temples to accept a large number of unspecified people.

#### はじめに

近年、四国遍路の研究はめざましい進展をとげ、多くの成果が蓄積されつつある<sup>(1)</sup>。だが、四国遍路における札所寺院そのものを対象とした研究はなお少なく<sup>(2)</sup>、遍路者が参詣の対象とした札所寺院がいかなる特徴をもつのかは必ずしも明らかでない。とはいえ、関連する巡礼史研究においては注目すべき研究も公にされている。たとえば秩父霊場の札所については空間史の視点から岩本馨氏の研究があり<sup>(3)</sup>、第一番札所妙音寺は特定の宗派に限定されない札所観音の空間がある一方、寺独自の施餓鬼会の空間をも合わせ持っており、二重の特徴があったという。四国遍路の札所寺院についても空間的な把握など、その特徴を自覚的に追及しておく必要がある。

ところで四国遍路については現在、世界遺産登録に向けた取組みが進められ、そのなかで資産の保護措置についても検討が行われている。そこでは資産として札所寺院および遍路道があげられ、それらの保護措置をとることが課題とされており、遍路道については保存良好なものは国指定史跡をめざす一方、札所寺院に

についても遍路道と一体的な形での保護が検討されている。だが、札所寺院は時代の重層性をもつものであり、その歴史的な価値づけを行う必要があるのはいうまでもない。

そこで四国4県では近年、札所寺院の所蔵文化財などを中心とした調査を進めており、香川県においても県内の札所寺院それぞれについて総合的に調査を実施し、その成果を報告書として刊行してきたところである<sup>(4)</sup>。それら調査の多くに筆者も参加し、膨大な資料の整理を進めてきたが、ただし注意すべきは、札所寺院に残された資料のうち遍路に関わるものはきわめて少ないという事実である。これは何を意味するのであろうか。そのことを考えるためにも、ここで札所寺院と遍路者に関する代表的な見方二つを整理しておきたい。

一つは、巡礼史研究を牽引してきた民俗学の真野俊和氏の研究である。真野氏によれば、札所寺院と遍路者は、「現実的に交渉する接点はおどろくほどに稀薄」であるという<sup>(5)</sup>。その理由として以下の3点をあげている。①宿坊の歴史はきわめて新しく、一部の通夜堂を除いて札所寺院に遍路が宿泊することはほとんどなかった。②札所寺院には遍路を対象とする行事が全く存在しない。③札所側は遍路の誘致策を持っていなかった。そして「現実的には四国遍路は、主として接待という習俗を媒介とする、順拝者と沿道住民との間の直接的な相互交渉を、第一義的な存立基盤として展開してきた」<sup>(6)</sup>とし、「札所とは、彼らのこうした歩き続けるという一連の行為を確認する場として位置づけられるべきではなかろうか」<sup>(7)</sup>と述べている。注目すべきは、ここでは「点としての札所」よりも「線としての道」を重視しているように考えられることである。このような見方は近年の四国遍路・巡礼史の研究者にもみられるもので<sup>(8)</sup>、真野氏の見解はその先駆といってもよく、四国遍路の本質的な性格等を議論するうえでもきわめて重要な意味をもつといえよう。

いま一つは、宗教学の頼富本宏氏の研究である。頼富氏は札所寺院における大師堂の整備について、「当初は修行者のみの参加であった遍路が、一般の庶民へと主流層が移動するようになると、四国の大師一尊化が急激に進んだ。その結果、大師堂は札所にとって不可欠なものとなり、江戸時代初期以降、四国全土に急速に建立された」<sup>(9)</sup>とし、「点としての札所」が整備充実していったことを指摘する。また頼富氏は、四国遍路についても理知的・合理的な説明が求められているとする一方、「しかし、だからと言って四国遍路から、宗教性・伝説性などが払拭されるわけではない。結果的には、八十八か所の札所（とくに本堂と奥の院）の現場における「聖なる場」と「俗なる人（遍路者）の関わる行や儀礼」がすべてであり、弘法大師という高僧が直接もたらしたもの（密教思想やマンダラ思想など）という一種の宗教的求心性・権威というものの必要性は揺るがない」<sup>(10)</sup>と述べており、このような聖なる場の求心性を重視する点にこそ、頼富氏の描く四国遍路像の特徴をうかがうことができる。つまり頼富氏は、聖なる場としての札所を重視し、四国遍路の基盤とみなしているといつてよい。

このように札所寺院に対する研究者の見方は大きく分かれているのが現状であり、さらにこの点を考えるには札所寺院側の実態、たとえば大師堂の建立・再興のいきさつなどをいま少し丁寧にみてゆく必要がある。

そこで本稿では讃岐国を例として、江戸時代の札所寺院（＝巡礼寺院）の特徴等について検討したい。そのために、まずは札所寺院特有の側面、すなわち頼富氏が注目した大師堂をはじめ、遍路者が直接使う茶堂などを空間的な意味も考慮しながら自覚的に跡づけることをめざしたい。そうした検討作業を通じて、札所寺院を考える視点を提示できればと考えている。以下、調査を進めてきた白峯寺・本山寺について検討するほか<sup>(11)</sup>、志度寺については所蔵される文化財以外の資料を中心としながら、大師堂再建の経緯などをみることにしたい。

## 1 札所寺院としての白峯寺

本章では第八十一番札所の白峯寺について検討したい。白峯寺は香川県坂出市青海町にある真言宗御室派の寺院で、綾松山洞林院と号する。本尊は千手観音。瀬戸内海に面する五色台の白峰山上にあって、古来、山岳仏教の寺院として栄え、隣接する崇徳上皇の山陵および廟所とともに広く知られた寺院であり、鎌倉時代の十三重塔や室町時代の寺号額（いずれも重要文化財）など、貴重な文化財も少なくない。中世の白峯寺は境内に多くの僧侶や子院が集まり、真言・天台や修験などの諸要素をあわせもつ一山寺院であり、近世には高松藩の保護を受け、崇徳院回忌の法要を柱として維持・運営が図られた。

まず巡礼者との関わりからみておこう。今回の調査によって六十六部聖が奉納した享禄5年（1532）の経筒が新たに確認された。この経筒については四国遍路の成立過程の問題とも関わり、別に論じたので<sup>(12)</sup>ここで

は繰り返さないが、寺域内の西寺から出土したという伝承をもつこの経筒の存在により、室町後期の白峯寺が奉納経所であり、巡り歩く人々にとって重要な場であったという点を確認しておきたい。

また近年、往来手形が普及する以前の遍路の通行手形についても研究が進みつつあり、2通の通行手形が紹介されている。一つは明暦4年(1658)の「廻り手形」(個人蔵)であり、これは阿波の持明院が発行したもので、土佐の第三十一番札所竹林寺・伊予の第五十一番札所石手寺・讃岐の第八十一番札所白峯寺がそれぞれ署判を加え、遍路の通行と宿泊を保障していたことが知られる。いま一つは延宝4年(1676)の通行手形(第五番札所地藏寺蔵)であり、発行した石手寺を含む札所8か寺が署判を加えている(讃岐では第七十五番札所善通寺と白峯寺)。これらによって江戸前期から遍路の通行と宿泊に白峯寺が関与していたことがわかる。白峯寺は「讃岐国を代表する札所」との共通認識があるといえよう。

江戸後期の白峯寺と遍路については、弘化4年(1847)の地誌『金毘羅参詣名所図会』に記述がある<sup>15)</sup>。それによれば白峯寺は「殊更四国霊場の札所なれば、山嶺の險路をいとはず諸人歩みを運ぶ事、寒暑陰晴の差別なく、日ごとに登山する事間断なし」とされ、遍路をはじめとする多くの参詣者が白峯寺を訪れていたことがわかる。

次に、調査によって新たに判明した大師堂の再興についてもみておきたい。仮堂のままであった大師堂は、寛政4年(1792)に勧進の版木が作られ、この頃から再興に着手されたようである<sup>16)</sup>。さらに同6年、再建計画に沿う形で、白峯寺の信者であった利兵衛が泉州で大師堂再建の勧進を行い、文化8年(1811)に大師堂が再建された。これが現在の大師堂である。

道の整備についても白峯寺の動向は注目される。寛政13年(1801)、白峯寺は参詣道の付け替えを願い出ている<sup>17)</sup>。すなわち春夏には遍路ら大勢の参詣者が登山し、とくに老人や女子、足の弱い者らが往復する参詣道であるので、付け替えて「七曲り道」を改善したいというのであり、白峯寺が積極的に遍路ら参詣者を誘致していたことがわかる。また同時期、白峯寺が参詣道沿いに松を植えていたが、その理由は「四国辺路其外往来の旅人寒暑ヲ凌ぐためであり、遍路者が念頭にあったとみてよい。このように道は札所寺院にとって重要な意味をもっていたのであり、とりわけ山岳系の札所寺院の場合、参詣者を誘致するには道が不可欠であったといえよう。

白峯寺では、遍路の宿泊施設である通夜堂(他の史料にみえる「遍路屋」のことか)についても建立をめざしていたようであり<sup>18)</sup>、時期は不明ながら、遍路のために通夜堂を建立して「常接待」=常時接待を行おうとしていた。

茶堂の整備については寛政12年(1800)の『四国遍礼名所図会』<sup>20)</sup>(白峯寺の項)の本文に「茶堂」の記載があり、この頃には茶堂があったことがわかる。また文政12年(1829)のものとみられる史料<sup>21)</sup>によれば、茶堂が古くなり柱根も朽ち損じ、屋根裏も大破の状況なので、建て替えたい旨が述べられ、継続的に維持されようとしていたことが判明する。さらに弘化4年(1847)の地誌『金毘羅参詣名所図会』の本文をみると、茶堂は「惣門の前にあり、遍路の旅人願ひてここに宿するもあり」とあり<sup>22)</sup>、ここで茶接待が行われたとみられる。

以上のように、白峯寺では札所寺院としての整備が進められていったが、寛政4年(1792)の大師堂は仮堂であるなど、この頃までは遍路者に向けた整備が進んでいるとはいえない。だが、江戸後期には遍路ら参詣者が増加したこと<sup>23)</sup>を背景に、大師堂・道・通夜堂・茶堂などに注意が向けられ、遍路者を念頭に置いた札所寺院としての整備も実施されていったのである。なお、大師堂については寺の自力による再興ではなく、この点は注意を要する。

## 2 札所寺院としての本山寺

次に、第七十番札所の本山寺の検討に移りたい。本山寺は香川県三豊市豊中町にある高野山真言宗の寺院で、七宝山持宝院と号する。本尊は馬頭観音。財田川と宮川の合流点に位置し、古代の官道である南海道にもほど近いなど交通の要衝に位置した。江戸中期の成立とみられる『七宝山本山寺縁起』<sup>24)</sup>によれば、大同2年(807)空海の開基と伝え、鎌倉末期の本堂は国宝、鎌倉後期の二王門は重要文化財に指定されている。近世には丸亀藩の支援を受けていたと考えられるが、基本的に地域に密着した村落寺院として展開した。明治3年(1870)の檀家は510軒で<sup>25)</sup>、近世においても同程度の数を維持したとみられる。ただし堂舎の修理を継続的に行うには開帳などの収益も必要とした。

遍路に関わるものとしては、延享2年(1745)の銘をもつ接待碑がある<sup>26)</sup>。現在も大師堂と十王堂との間に建っているもので、そこには「施主 比地中村 石井万治」、「永代常接待」などと刻まれており、近隣の住人である石井氏が永代にわたって接待を行うことを標榜したものとわかる。このように接待が行われる場である札所・本山寺は、遍路者と地域住民とをつなぐ結節点であったといえよう。

遍路者が使ったとみられる茶堂も設置されていた。明治12年(1879)の「本山寺由緒書」<sup>27)</sup>によれば、この茶堂は先の接待碑と同年である延享2年に施主の三野郡比地中村の石井万治郎が建立したもので、永代茶を焚き接待することを心願として、耕宅地8反5畝11歩を寄付し、その後、茶堂が破損したので安政6年(1859)に石井時四郎および石井増治郎が再建したという。茶堂が継続的に維持されていたことがわかる。また、この茶堂の施主は先の接待碑の施主と同一であり、接待碑とあわせて茶堂がつくられたとみられる。

遍路屋の整備については「遍路屋記録之覚」<sup>28)</sup>があり、それによれば延享2年に竹田村(本山寺の北側に位置する近隣村落)の辻治兵衛尉が数年の志願によって遍路屋を建立したという。接待碑と同年であり、その関連も考えられるが、いずれにせよ、この頃から増加したとみられる遍路者を受け入れる意味があるのだろう。

注目すべきは大師堂の建立に関する史料である。冒頭部分に大師堂建立の経緯を記載する「覚」<sup>29)</sup>によれば、「東国之廻国行者源次郎」が病氣となり、助命を願って大師堂建立の願主となったことがわかる。この時、本山寺には東国者の「浄入」という道心者(中年になって出家した下級仏教者)もおり、願主に加わっていたことが知られる。このように本山寺の大師堂は廻国行者が伽藍整備に関わっていたのであり、近年明らかにされた六十六部廻国行者による札所寺院の伽藍整備の事例<sup>30)</sup>と同様に考えることができるだろう。

ただし本史料は年紀を欠くが、大師堂の棟札が寛政7年(1795)のものであり、それ以前の可能性が高い。諸史料によって本山寺大師堂の整備についてまとめておくと、元禄2年(1689)の『四国徧礼霊場記』<sup>33)</sup>(本山寺の項)には大師堂の記載がないが、これ以後、「覚」にみえるように東国の廻国行者源次郎や東国者の浄入が願主となって勧進等を行い、大師堂は寛政7年(1795)に建立される。そして同12年の『四国遍礼名所図会』<sup>34)</sup>(本山寺の項)には「大師堂(本堂のまへにあり)」との記載を確認することができる。

以上のように本山寺は、境内に今もある接待碑の存在から接待が行われる場であったことがわかるが、それにふさわしい空間として整備されていったといえる。茶堂の設置や大師堂の建立などからは、本山寺が遍路者を迎え入れる開かれた空間として整備されていったことを見て取ることができる。また巡礼者が大師堂建立に関与していたのであり、ここでは寺と巡礼者との間に相互利益の関係があり、札所寺院の側からいえば、その整備に巡礼者を組み込んでいったとみることもできるだろう。

### 3 札所寺院としての志度寺

最後に本章では、第八十六番札所の志度寺について検討したい。志度寺は香川県さぬき市志度にある真言宗寺院で、補陀落山清浄光院と号する。本尊は十一面観音(重要文化財)。観音霊場として名高く、後白河法皇が撰した歌謡集『梁塵秘抄』には「四方の霊験所は、伊豆の走湯。信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成合とか。土佐の室生戸、讃岐の志度道場とこそ聞け」とあり<sup>35)</sup>、平安末期にはその名が都にも聞こえていた古刹である。鎌倉末期から南北朝期にかけて豪華な志度寺縁起絵6幅(重要文化財)が次々に作られており、絵解きを行うなど活発な宗教活動を展開した。この縁起絵に描かれた「海女の玉取り伝説」は、謡曲「海女」の原話にもなり、境内には海女の墓と称する石塔がある。このように志度寺は中世以来の縁起を濃厚に継承する寺院であり、当初は天台宗的な側面もある顕密寺院であった。戦国期に衰退するが、その後、生駒氏、松平氏が再興し、寛文10年(1670)に高松藩初代藩主松平頼重が本堂・仁王門(いずれも重要文化財)を再建し、翌11年には焰魔堂・奪衣婆堂(いずれも県指定文化財)を建立するなど、高松藩の保護を受けた。近世の志度寺は仁和寺末寺であった。

さて、最初に巡礼者との関わりからみておきたい。志度寺所蔵の棟札には次のようなものがある<sup>36)</sup>。

一、米三十穀、大旦那国主雅楽頭御内方さま教芳院殿也、本願円朝上総州住人也、今者志度寺部屋二住也、大工ハ備前国山田村住人、藤原大工七右衛門勤之、

一、讃州志度寺観音堂、本願円朝法印(花押)于慶長九年甲辰十月十三日、寺家衆花巖坊、常楽坊、西林坊、林蔵坊、空円坊、教円坊為武親成仏、

一、慶長九年甲辰十月十三日志度寺観音堂本願者不思議成以縁、当寺住関東上総大台住人堅者円朝法印（花押）」

これによれば、慶長9年(1604)に「雅楽頭」(生駒親正)の夫人・教芳院殿が、観音堂を再興し、関東上総国の出身である円朝法印が本願となっていたことがわかる。つまり関東の廻国行者が志度寺の再興に関与していたのであり、志度寺は巡礼者が訪れる寺院であったといえよう。この他、六十六部供養塔が境内に複数あること<sup>67)</sup>もこれを裏づけるだろう。

次に、接待と接待堂(茶堂)については、嘉永6年(1853)の地誌『讃岐国名勝図会』<sup>68)</sup>の本文に「撰待堂」の記述があり、また同書の図の中では本堂の西側に「茶堂」を掲載しているので、ここで茶接待が行われたとみられる。

接待碑は本堂の西側にあり、「永代常撰待/施主/小豆嶋中」と刻まれたものである。この設置場所は『讃岐国名勝図会』の「茶堂」の辺りであるので、やはり茶堂において茶接待をしていたのであろう。ただしこの接待碑は年紀を欠き、時期は不明であるが、志度寺においても他寺と同様、遍路ら参詣者の増加を背景として札所寺院としての境内整備が行われ、境内に接待堂が設置されたとみられる。

注目すべきは大師堂の再興に関する史料[志度寺大師堂再建勧進]<sup>69)</sup>である。長文ではあるが未紹介史料があるので、次に掲げておく。

(一オ)

抑四国第八十六番讃州志度寺ハ預弥国焰魔王草創、本尊十一面観世音菩薩なり、御衣木の因縁を尋るに、往昔継体天皇十一年江州高嶋郡白蓮花谷より流れいで七十年湖水に漂ひ、推古天皇の頃終に当浦の磯辺に流れよる、時に菌子尼とて文殊化現の尼あり、常に十一面の像を彫刻せんと願ふ、故に此木を引あげ給ひければ補陀落観音仏師と現し、一日の内に作り給ふ尊像なり、又堂殿は焰魔王番匠とあらわれ、七日のうち二建立し玉ふ、其後天智天皇の御宇、鎌足公息女、唐の太宗皇帝の後に備り給ふ時、泗浜石・花原聲・面向不背珠等の種々の宝器を吾朝へ送り玉ふ、折から当浦にて

(一ウ)

俄に難風起りし故、唐使龍神此珠を望み玉ふなるべしとて舩より海中へ入んとしけるに、大なる手を指出し彼玉を取り入ぬ、其後鎌足公御子淡海公、天武天皇九年此浦に下り玉ひ海士人に契りをなし三年に及び一子誕生す、其時当浦を房前といふ故に御子を房前大臣と称す、彼海士観音へ深く誓ひて龍穴に至る、彼大慈大悲の冥応にや件の玉を取得たり、海士人を舩より小嶋にあげし所新珠嶋といふ、あらたに玉を得たる故とかや、其玉南都興福寺に納るなり、其後持統天皇八年、房前大臣、行基菩薩俱に当浦に渡御し給ひ、亡母海士人のためにとて伽藍を修造し

(二オ)

たまひ、また千基の石塔を建て都にかへり給ふ、則海士人の法名宝生女と云々、また延暦のころ淀の白杖といふもの死して焰魔の庁庭に至る、王のたまはく、日本国讃州志度寺ハ吾氏寺にして観音結界の霊場なり、汝娑婆に帰りて彼道場を建立すべしと白杖勅命をうけ奉て出ける、道にて獄卒女を責ける故を問ふに彼女ハ讃州庁官といふ長者の娘なりと白杖慈念たへがたくして又王宮にかへり、願くハこの女を娑婆かへしたまハゞ、かれが力を頼んで志度道場を造り奉らんと終□(二)彼二人とも蘇生して夫婦となり、伽藍を建立せり、

(二ウ)

其供養の時、当願暮当とて二人の獵師あり、当願法事の庭詣てつゝ邪念を起し、生なから蛇身となる、故に暮当是を愍んで当国万農池に入る、暫くありて大蛇となりうかひ出ていわく、汝が恩ふかし、我眼の玉をぬいて報ぜん、かめに入一度酒を造れば酌ともはてじと暮当帰て教のごとくし家富けるとなん、其後彼玉故ありて禁裏より宇佐八幡へ奉給し給ふと云々、其余、松竹童子、千歳丸、阿一入道蘇生の因縁、本縁起に具也、又焰魔王ハ往昔当寺のあたりに弥阿と言ふミだ専修念仏の尼あり、一夕病なくして死す、忽ち焰王の前に至る、王いわく汝

(三オ)

□(娑)□(婆)にかへり志度寺の東に堂を構へ我人に等しき像を彫安置すべしと、てづから御身をはかりて弥阿に渡し玉ふ、弥阿是を請奉りて夢の覚るが如く蘇生す、それより諸人を勧て彼像を彫刻し畢ぬ、

今安置の尊像則是也、此像宝冠に十一面の仏を戴き給ふ、観音・地蔵・焰王同一躰なる義を示し給ふと見へたり、又西に奪衣婆堂あり、是像ハ当寺の東ニ大なる淵あり、昔此淵より出現し玉ふ像なり、委しき事ハ縁起ニあり、誠やかゝる故ある霊場なれば、一度参詣の輩ハ永く地獄の道を閉、安養の刹土に往生なさしめ給ふ、焰王観音の御誓願難有事ならずや、しかのミならず高祖大師四国八十八ヶの霊場を定め給ふ時、当寺を第八十六番と

## (三ウ)

定玉ふ、彼是難有事ハミじかき舌を以のべがたし、故ニ諸国の人々きそひ詣で、結縁し給ふ事うべならずや、然ルニ大師堂大破ニ及びて今仮堂ニ安置す、冥慮恐れ多し、時の院務、堂再建の志を起すといへ共、自力ニ及かたくて止め、又所在家の衆中度々再建の志あれ共、再建かなわず、爰に不思議の因縁ニ而、浪花なる南海行者優婆塞恵信といふ人ハ幼年のときより四国辺路既ニ四十ヶ年ニ及び氏神の告ありて剃髪し順拜廿一辺成就す、猶三十三度の願心を起して順る折から当山大師堂のかり成ル事を見及びて願くハ、諸人を勧め再建せばやとて当院主にかたる、院主も数年の志願なれば渡りに舟を得るこゝちして是を観音講中に

## (四オ)

かたる、講中も皆よろこびて再建の時至れりと心を合せて十方の人々を勧め、日参講を企て、諸国の人々を頼、日ならずして再建し奉らんと思ふ□願ハ人々観音結界の霊場、有世財をなげうち高祖大師の御恵ミに預り、焰王の御誓ひにもれず、此霊場にあゆミを運びし功德に等しき日参講なれば、志あらん人ハ姓名を此帳にしるし給へ、家内安全子孫長久を祈り侍る、又志の亡霊あらんにハ過去帳にしるして後々の世までも当寺の院主、朝暮怠らず廻向したまふもの也、

于時文政十一（戊子）秋八月吉辰

〔 〕 壺人前一日に壺錢ヅ、三ヶ年の間なり、

## (四ウ)

願主 志度寺上人

願主

四国三十三度之行者

祈道恵信

世話人讃州志度浦 観音講中

木屋半左衛門

神前屋広治

二見屋清兵衛

本史料は文政11年(1828)8月に作成された版本で、4丁からなる。1丁表~3丁表は、志度寺の縁起について記載し、3丁裏以降は、志度寺大師堂の再建について記載する。3丁裏によれば、この時、大師堂は仮堂であり、その再建のため勧進を実施しようとしていたことがわかる。勧進者は浪花の南海行者で、「四国三十三度之行者」と称する祈道恵信であった。恵信は幼い頃から「四国辺路既ニ四十ヶ年」に及び、順拜21回を成就した人物で、33回を期す願心があることから、「四国三十三度之行者」と称したとみられる。なお、本山寺に所蔵される『光明帖』上・下(版本)の巻頭・巻末には「納主四国廿一遍行者徧礼中祖恵信」の印があり、本書が恵信の関係史料であることがわかる。

ところでこの恵信は、最近の四国遍路研究の中で注目を集める人物であり、文政6年に『四国徧礼略縁起』(おへんろ交流サロン蔵)を作成していたことが知られる<sup>(41)</sup>。その巻末の「四国中徧礼道筋定宿名面」に一番~八十八番まで120か所近くの定宿一覧を付けており、ここには「志度町ぜんにん多し」とあり、志度が恵信の活動拠点の一つであったことがうかがえる。

また恵信は文政12年に『御室御所御山内 宝篋印塔四十九院鳥居御建立四国徧礼無銭渡御供養一件帳』を作成している<sup>(42)</sup>。村上紀夫氏によって紹介された本史料をみると、恵信が四国遍路を21遍巡り、お礼参りとして12遍を發願し、33遍をめざしている途中であり、廻國中、各地で堂宇や仏像・石橋・板橋など多数の勧進をしたことがわかる。

本史料などから恵信の経歴を簡単にまとめておくと、恵信は俗名を矢柄与右衛門といい、安永5年(1776)

に生まれ、15歳の頃から四国遍路を開始している。その後、文政5年(1822)に阿波の焼山寺麓の右衛門三郎旧跡が焼失したため、翌6年に焼山寺の庵室・通夜堂の高祖大師や右衛門三郎の木像にいたるまでを再建したという。そして同年、夢告により浪華にて剃髪し、恵信と改名。順拝に励み、黒髪を衛門三郎の木像に植えるなどしながら四国遍路21遍を成就したという。『四国徧礼略縁起』を發刊したのも文政6年のことであり、そこには「四国徧礼二十一遍大行者恵信」とみえる。また翌7年には『光明帖』を「納主四国廿一遍行者徧礼中祖恵信」として奉納した。さらに同11年に[志度寺大師堂再建勸進]を作成して志度寺大師堂の再興を図り、翌12年5月に仁和寺日本惣法務宮(濟仁法親王)から「日本四国徧礼惣大先達開発」の号を与えられ、御室八十八ヶ所内の宝篋印塔の建立勸進を実施し、同年9月には御室宝篋印塔の建立をみたという。

注目すべきは、文政12年に恵信が仁和寺によって「日本四国徧礼惣大先達」に補任されていた事実である。周知のように仁和寺が六十六部廻国行者に法度を發給して管理していたことを思えば、この「日本四国徧礼惣大先達」への補任とは、仁和寺による恵信を介した四国遍路の管理・統括の意図を示すものとみてよからう。だが、村上氏も指摘しているように、結果的にはこの四国遍路の組織化は失敗したとみられる。それがなぜ成功しなかったのか、この点は四国遍路の特徴を考えるうえでも興味深い。

これまで志度寺大師堂の整備についてみてきたが、諸史料によって整理しておく、元禄2年(1689)の『四国徧礼靈場記』<sup>43)</sup>(志度寺の項)には大師堂の記載がないが、寛政12年(1800)の『四国遍礼名所図会』<sup>44)</sup>(志度寺の項)には「大師堂(本堂に隣る)」との記載があり、この間に大師堂が建立されたとみられる。しかしその後、大師堂は仮堂となり、文政11年(1828)に[志度寺大師堂再建勸進]が作成され、恵信によって大師堂の勸進が開始されることとなる。この大師堂が完成をみたのは、棟札によれば天保4年(1833)のことである。<sup>45)</sup>

以上、志度寺の大師堂にみられるように、札所寺院の整備において巡礼者の関与があったことが知られる。とりわけそれが本山寺と同様、大師堂であったことは興味深い。というのは、大師堂は真言宗に限らない超宗派的な性格をもっており、不特定の人々を受容する「信仰の場」<sup>46)</sup>であったと考えられるからである。その意味からいえば、遍路道沿いにある大小の大師堂と共通する性格をもち、いわばそれが境内空間に持ち込まれたとみることもできる。このことはまた、境内空間の「公共性」の問題とも関連するだろう。このように札所寺院は、開かれているがゆえに巡礼者の拠点ともなり、彼らの助力を受けていたとみられるのである。

## おわりに

以上、煩雑な実証に終始したが、江戸時代における札所寺院整備の具体的様相について、讃岐の白峯寺・本山寺・志度寺を例として検討してきた。本稿で明らかにしたのは札所寺院の多様な側面の一部にすぎないが、江戸後期の札所寺院は、大師堂の再興や茶堂の設置など遍路らを迎え入れる開かれた空間として整備されていたのであり、ここに不特定多数の人々を受容した札所寺院の性格をみることは可能だろう。

残された課題は多いが、札所寺院と道との関係を解明することもその一つである。元禄2年(1689)の『四国徧礼靈場記』に掲げられた略図では、札所へ至る道を「〇〇道」と記載しており、しだいに巡礼道の固定化が進んでいったとみられる。そのような不特定多数の人びとを導き入れる道の確立は、札所寺院にとって重要な意味をもっていたと考えられる。実際、白峯寺が道の整備に着手していたように、札所寺院が遍路ら参詣者を誘致していた事実は、札所寺院が不特定多数の人々を受容し、それに依存する方向性をもっていたことを意味するだろう。そしてそれは、寺の経営面にも少なからず関係していたはずであり、今後はそうした側面も含めた総合的な札所寺院の研究が必要となろう。

## 註

- (1) 四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』(法蔵館、2007年)、頼富本宏『四国遍路とは何か』(角川書店、2009年)、武田和昭『四国辺路の形成過程』(岩田書院、2012年)など。
- (2) 江戸時代における四国遍路の札所は寺院および神社であり、札所寺院というより札所霊場とよぶべきかもしれないが、本稿が分析対象とするのは寺院であるので、以下、札所寺院と表記する。なお、先駆的な札所寺院の研究としては星野英紀「四国霊場寺院の形態と機能—岩屋寺の場合—」(『豊山教学大会紀要』2、1974年)がある。
- (3) 岩本 馨「札所」(『身分的周縁と近世社会6 寺社をささえる人びと』吉川弘文館、2007年)。

- (4) これまでに香川県で総合的に調査し、報告書を刊行してきたのは、第六十七番札所大興寺、第六十八・六十九番札所神恵院・観音寺、第七十番札所本山寺、第七十一番札所弥谷寺、七十二番札所曼荼羅寺、七十三番札所出釈迦寺、七十四番札所甲山寺、七十五番札所善通寺、八十一番札所白峯寺、八十二番札所根香寺、八十三番札所一宮寺、八十七番札所長尾寺である。なお、これら札所寺院の所蔵文化財調査は、香川県による基礎調査の後、公益財団法人元興寺文化財研究所などに委託して詳細調査を実施した。
- (5) 真野俊和「四国遍路への道—巡礼の思想—」(『季刊 現代宗教』1-3、1975年、後に『日本歴史民俗論集 8 漂泊の民俗文化』吉川弘文館、1994年に再録、305頁)
- (6) 同上307頁。
- (7) 真野俊和『旅のなかの宗教—巡礼の民俗誌—』62頁(日本放送出版協会、1980年)。
- (8) たとえば中山和久氏は「日本の巡礼民俗は聖地への志向性が低く、「聖地への旅」というよりは、神仏などの超自然的な存在との関わりで営まれる「聖なる旅」といえる」とする(同「民俗学から見た日本の寺社参詣文化」、『寺社参詣と庶民文化』岩田書院、2009年、58頁)。
- (9) 頼富本宏『四国遍路とは何か』173頁(前掲)。
- (10) 同上14頁。
- (11) 白峯寺については『四国八十八ヶ所霊場第八十一番札所 白峯寺調査報告書 第1分冊』(香川県・香川県教育委員会、2012年)、『四国八十八ヶ所霊場第八十一番札所 白峯寺調査報告書 第2分冊』(香川県・香川県教育委員会、2013年)による。以下、『白峯寺調査報告書 第1』、『白峯寺調査報告書 第2』と略称。また本山寺については『本山寺総合資料調査報告書』(香川県教育委員会、1999年)および『四国八十八ヶ所霊場第七十番札所 本山寺調査報告書』(香川県・香川県教育委員会、2016年)による。
- (12) 拙稿「讃岐国白峯寺の成立と展開」(『戦国・近世初期 西と東の地域社会』岩田書院、2019年)。
- (13) 武田和昭『四国辺路の形成過程』401頁以下(前掲)。
- (14) 町田 哲「札所寺院の文化財調査—五番札所地蔵寺と四国遍路—」(「遍路文化を活かした地域人間力の育成」鳴門教育大学、2010年)。
- (15) 『金毘羅参詣名所図会』(『日本名所風俗図会14』角川書店、1981年)。
- (16) [白峯寺大師堂再建勧進(版本)](『白峯寺調査報告書 第1』(前掲))。
- (17) 『白峯寺諸願留』宝蔵7-5<20>(『白峯寺調査報告書 第2』(前掲))。
- (18) 『御用日記』文政七年甲申正月(渡辺家文書、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)。
- (19) 渡辺家文書1163号(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵、『白峯寺調査報告書 第2』(前掲))。
- (20) 『四国遍礼名所図会』(『四国遍路記集』伊予史談会、1983年)。
- (21) 「奉願上口上」(『白峯寺大留』宝蔵7-9<84>、『白峯寺調査報告書 第2』(前掲))。
- (22) 『金毘羅参詣名所図会』(前掲)。
- (23) 宝暦13年(1763)の崇徳院六〇〇回忌以後、白峯寺では参詣者が増加・定着してゆくようである。
- (24) 『七宝山本山寺縁起』(『香川叢書 第一』)。本山寺の先行研究としては、『本山寺総合資料調査報告書』(香川県教育委員会、1999年)がある。
- (25) 『本末寺号其外明細帳』(本山寺文書第435箱359号)。
- (26) 「第3章 石造物」第2表4-1(『四国八十八ヶ所霊場第七十番札所 本山寺調査報告書』(前掲))。
- (27) 「本山寺由緒書」(本山寺文書435箱183-2号)。
- (28) 「遍路屋記録之覚」(本山寺文書41箱2-17・34号)。
- (29) 「覚」(本山寺文書435箱400号)。
- (30) 武田和昭『四国辺路の形成過程』420頁以下(前掲)。
- (31) 『本山寺総合資料調査報告書』によれば、本史料のほかにも大師堂の建立に関する文書が6通あり、このうち5通は「子ノ十月」の記載がある。
- (32) 大師堂寛政建立棟札(『本山寺鎮守堂 保存修理工事の記録』本山寺・本山寺奉賛会、1992年)。
- (33) 『四国徧礼霊場記』(前掲)。
- (34) 『四国遍礼名所図会』(前掲)。
- (35) 『梁塵秘抄 卷第二』(新古典文学大系56)。
- (36) 黒川隆弘編『讃岐社寺の棟札(1)』(1979年)。本資料については武田和昭『四国辺路の形成過程』422頁以下でも触れられている(前掲)。
- (37) 志度寺の薬師堂横に宝永6年(1709)の地藏菩薩立像、大師堂裏に正徳6年(1716)の墓標などがある。
- (38) 『讃岐国名勝図会』(『日本名所風俗図会14』角川書店、1981年)。

- (39) [志度寺大師堂再建勸進] (松浦文庫9628号、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)。なお、読点は筆者が適宜付した。また一丁表は(一オ)、二丁裏は(一ウ)のように表記した。二丁以下も同じ。
- (40) 『光明帖』上・下 (本山寺文書195箱1号)。
- (41) 田井静明「香川県の木食・六十六部資料について—四国遍路に関連して—」(『ミュージアム調査研究報告』6、香川県立ミュージアム、2015年)。
- (42) 村上紀夫「御室八十八ヶ所と恵信」(同『近世勸進の研究—京都の民間宗教者』法蔵館、2011年)。
- (43) 『四国徧礼霊場記』(前掲)。
- (44) 『四国遍礼名所図会』(前掲)。
- (45) 黒川隆弘編『讃岐社寺の棟札(3)』(1999年)。
- (46) 江戸の寺院境内地の空間利用の問題について検討した金行信輔氏は、江戸の多くの寺院が有していた社会的機能として①菩提所、②祈禱所、③信仰の場、④地主をあげ、一般に寺院はそれらの機能を複合的に有したが、境内地を構成する空間要素との関係を見ると、①③④の機能には、それぞれ①墓地、③堂舎・社殿、④門前(門前町屋・境内貸屋)または広場(営業地)、といった要素の存在が不可欠であると指摘する(同「寺院境内—社会関係と空間の諸相」『江戸の広場』東京大学出版会、2005年)。そして開放性を有する境内のオープンスペースを仮に「広場」と呼ぶとすれば、境内の「広場」とは堂舎・社殿という宗教施設をとりまく空間であり、神仏に対する「③信仰の場」として不特定多数の参詣者を受容しうる点にその本質があったとする。四国遍路の札所寺院においても大師堂などを中心とした空間が、開かれた「信仰の場」として機能していたといえよう。